

歌人西行の原点

渡部泰明

平成二十六年の三月三十一日、愛知県立大学サテライト教室で催された一人称研究会において、「和泉式部から西行へ」という題で話をさせていただきました。とても熱心な学生さんや卒業生の方々に聞いていただいて、大変楽しく、有意義な時間を過ごさせていただきました。大学院の学生時代以来お教えをいただきてきた久富木原先輩に司会をしていただき、また同じ研究室で共に学んだ伊藤伸江さんにも何くれとなくお世話を頂戴し、有り難くも恐縮するほかにい時間でした。

さて、その時お話ししたのは、和泉式部と西行の和歌に、まるで「私」が二人いるような人称の分裂があり、そうした二人の共通点の意義を考えてみようとしたものです。私の話の拙さはもちろんのこととしてさておき、和歌史を代表するような大歌人を二人も取り上げるなどという欲張りなことをしたために、ずいぶん舌足らずになってしまいました。そこで、この場をかりて、西行の歌の一首に

ついて、今考えていることを、述べたいと思います。拙い話の補足になれば、と。それは、西行の歌人としての出発点といつてよい歌についてです。私が西行を考える上で、重要なヒントを与えてもらっている一首です。

研究会の当日、西行の身と心が分裂するような歌をいくつか引いて、「西行の和歌は、自己分裂（一人称の分裂）を演じながら、他者に挑発的に誘いかける対話性（二人称性）を孕んでいるのではないか」などという、少々抽象的な結論を示しました。人称の分裂は、演技があつてこそ、人に訴えかける力をもつ、と考えたわけでは、その西行の演技とはどういうものなのか、もつと彼の資質に即してお話ししたいと思います。

西行には、いくつかの家集がありますが、その中でももつとも有名であり、一番歌数の多い『山家集』に、次の歌が収められています。

京極太政大臣中納言と申しけるをり、菊をおびたしき程にしたてて、鳥羽院にまゐらせ給ひたりけり。鳥羽の南どの東ひがしの壺かめに、ところなきほどに植ゑさせ給ひたりけり。公重きんげの少将、人々勸めて菊もてなされけるに、加はるべきよしありければ

君がすむ宿の壺をば菊ぞかざる仙ひりの宮とやいふべかるらん(山家集・四六六)

京極太政大臣とは、中御門宗輔なかみかどむねすけと呼ばれた藤原宗輔(一〇七七—一二二二)のことです。彼がまだ中納言であったとき、たくさんの菊の花を準備して、鳥羽院に献上した、ということがありました。そしてその菊を、鳥羽殿の一角である南殿の東側の壺(中庭)に、隙間もないほどびっしりと植ゑさせました。その際、藤原公重という少将だった人が、人々に菊を讚美する歌を詠もうじやないか、と誘った。その時西行にも声をかけた。お前もどうだ、詠んでみないか、と。公重は西行が仕えた藤原実能さねよしの猶子で、しかもほとんど同年輩ですから、前から親しい間柄だったと思われれます。歌人としても知られた人です。そして西行が詠んだのが、「君が住む」の歌です。

鳥羽院が住んでいらつしやるお屋敷の壺を、菊がみごとに飾っている。なるほど「仙宮」というにふさわしい飾り付けなのでしょうね。

という意味です。「ひじりの宮」というのは、仙人の宮殿という意味と、「仙洞」(上皇の御所)の意の掛詞です。菊は長寿のしるしとして仙人と関わり深く、鳥羽殿は、鳥羽院の離宮ですので、その二つをうまく重ねて表現したわけです。それからどうなったか、何も書いていませんが、喝采を浴びたのではないのでしょうか。うまいことというじやないか、という感じ。その感じを、もう少し丁寧に見してみましよう。

そもその張本人、藤原宗輔が「中納言」であったのは、保延六年(一一四〇)三月二十七日までのことです。西行はその保延六年の秋から冬にかけてのことでしょう。すると、西行は、まだ出家する前で、佐藤義清のりきよと名乗っていた俗人の時のこととなります。現在残されている西行の歌の中で、出家前だとはっきりわかる歌は、実はかなり限られています。しかも、その限られた歌も、基本的に出家や仏道に関わる歌なのです。もちろん出家する前も、たくさん歌を詠んだことでしょう。普通の季節の歌なども。けれど西行は、後に家集を編纂する時に意識してそれらを排除したようです。あるいは、在俗のときに詠んだと、はつきりとはわからないように入れておられるかと思われれます。通世歌人のプライドというべきでしょうか。しかしこの歌だけは、珍しく、俗人であったときの様子をありありと

伝えている。それだけ忘れがたかったからなのだと思います。では、何が忘れがたかったのでしょうか。

まず、鳥羽殿という場所を考えてみましょう。鳥羽殿は、先にも言ったように、鳥羽院の離宮です。鳥羽離宮ともいいます。平安京から南に3キロメートルほど離れた、鴨川と桂川の合流地点に造営されました。「殿」といつても一つの建物ではありません。壮麗を極める、いくつかの建造物群から成る、都市と呼んでもよい空間です。「南殿」は、その中に複数ある寝殿の一つです。鳥羽殿の建造を始めたのは、鳥羽院の祖父にあたる白河院。鳥羽院はそれをさらに拡充・整備しました。院政をしき、絶大なる権勢を誇った上皇の、権力の象徴ともいえる都市空間です。しかも池と庭園の広がる、美と遊興の空間でもありました。中庭を菊で埋めてしまえ、などという遊び心に満ちたアイデアが生まれるのも、理由のないことではないのです。

しかもその菊を用意した藤原宗輔という人物がまた、なかなか面白い人でした。「蜂飼の大臣」と呼ばれ、蜂を大量に飼育していて、「誰それを刺して来い」と自由に操ったというのです。『十訓抄』（一ノ六）などに伝える説話です。その『十訓抄』には、今回の舞台である鳥羽殿の話も載っています。鳥羽殿の院（鳥羽院でしよう）の御前で、蜂の巣が落ちて大騒ぎになったとき、宗輔がおもむろに

琴爪ことづめ（琴を弾くとき指に付ける道具）で枇杷の实の皮をむき、そこに蜂を全部とまらせて難を防ぎ、院の御感にあずかった、というのです。説話ですから、すべて事実だと鵜呑みにするわけにはいきませんが、少々変わったところのある人だったのでしよう。琴爪や枇杷の实の扱い方など、いかにも芝居がかつていて、世にも珍しい蜂飼の芸を見せられているようです。

そんな彼のプロデュースで、鳥羽殿の一角の中庭に、菊で埋められた空間が出現することになりました。イベントでもやっているような調子ですね。何だか、学園祭のような盛り上がりです。鳥羽殿という特異な遊興空間に、そういう演劇的な遊び心を促す雰囲気があったのでしよう。その催しのとどめが、和歌でした。和歌を詠むことで、この一回的なイベントも長く記念されるものになるのです。その意味で、和歌は評語とか、キャッチフレーズに近い働きをするといえましょうか。そこで義清が詠んだのが、先に上げた和歌でした。もう一度あげましょう。

君がすむ宿の壺をは菊ぞかざる仙のりの宮とやいふべかるらん
「仙の宮」が掛詞だということは前に言いました。この掛詞が、作者の一番の狙いで、きつとおおいに評価されただろう、と想像しました。それだけではなく、もう一つこの歌にはたくらみがある、と私は思っています。それは、仙人の意味の「ひじり」と、「壺」が

縁語になっていることです。「壺」は表の意味では中庭のことです。その場合は、「坪」と描いた方がわかりやすいかもしれません。一方、器としての「壺」は、これも仙人と深い関係にあります。例えば、『和漢朗詠集』に次の摘句が見られます。

壺中の天地は乾坤けんこんの外ほか 夢の裏うちの身名しんみは旦暮たんぼの間（和漢朗詠集・仙家・五四〇・元種）

壺の中の世界はまるで別世界で、それに比べて夢のような人生で名誉を得ても、一日もたない、というような意味です。「壺中の天地」は、後漢の費長房が、仙人である壺公の持つ壺の中にある仙宮世界を見た故事をふまえています。『神仙伝』などに語られる話です。義清はこの故事も取り入れました。ほら、これこそ費長房が見たという、壺の中の仙宮じゃないか、という意味も、込められていると思うのです。それによって、「上皇の御所」の「壺」に「菊」がある、というこの場合の特殊な現実を表す三点が、びたりと組み合わせられて表現されていることになるわけです。上手いでしょう。この特殊なイベントの中、鳥羽殿という舞台の上で、あつとおどろく離れ業を演じたわけです。喝采を浴びたと、私が判断した理由がわかっていただけでしょうか。

そして私がなにより興味を惹かれるのは、通世者となつてからも、西行がこの歌を決して忘れなかつたことです。詠まれた詳しい状況

をも含めて、家集に残したことです。俗人のときの俗人らしい歌は、それと明確に判明する形では残さないという、おそらく自分自身に課していただろうルールを破つてまで。たまたま記憶に残つていただけ、とは思えないのです。きつとそこには、西行なりのこだわりがあつたにちがひありません。

義清は、人々の中で、その場に應じて巧みに和歌を詠んで注目を集める、そういうことに才を発揮し、快をも感じる男だつた。いわば天性の俳優だつた。出家して西行と呼ばれるようになって、その性格は基本的に変わらなかつた。むしろ、和歌を詠むことが仏道に通じる面があるという大義名分があることで、それを原動力にして、いっそう熱心に歌を詠んだ。歌に人の心を動かす力があることを、もつと生かそうとした。そんなふうには考えられないでしょうか。もしそうなら、西行はけつして孤独に自分の心情を表白しようとしたのではなく、人々に向けて、人の心に歌で揺さぶりをかけようとしたことになりました。その歌は、ただ自分の思いが表現できればよい、という類のものではなく、他者への強い語りかけを意識していることになるわけです。ましてや、自意識に閉い込まれ、自問に閉塞しているわけではない。まるで俳優のように、演技している西行。いえ、和歌を自分で作るのですから、劇作家兼俳優というべきでしょうか。私はそのようなイメージで西行を捉えています。こうした演

技する資質があつてこそ、彼が和泉式部から受け継いだ人称の分裂の表現なども生かされる。人称の分裂とは、自分を他者のように見つめることですから、他者の視線を意識する演技と、深く結びついているのです。そういう面から彼の和歌を読み直したいと思つているところです。

